

[発表要旨]

「人間学」としての倫理学の特徴とその意義について ——三木清の「哲学的人間学」の構想から——

神戸医療未来大学 非常勤講師
服部圭祐

本発表の目的は、三木清(1897-1945)が自身の哲学上の立場として提唱した「哲学的人間学」の構想について、それが「哲学」および「倫理学」を「人間学」として遂行するものとなっている点に注目しつつ分析することを通じて、「倫理学」が「人間学」として規定されることの意義について検討することにある。これまでに日本で行われてきた倫理学研究の中には「倫理学」を「人間学」として捉えているものが散見される——例えば島芳夫『人間性と倫理』(1948)など——が、「倫理学」に対してそのような「人間学」という性格が与えられるということが、そもそもいかなる意義を有しているかという点については、これまで十分に立ち入って解明されてこなかったように思われる。発表者の知る限り、三木は自身の立場を「哲学的人間学」という形で提示しようとした最初の研究者の一人であるが、彼の「人間学」の構想を知ることは、今日の我々によって行われる哲学・倫理学研究がそのような「人間学」としての性格を保有することの意義と得失について把握する上で、一つの手掛かりをもたらすように思われる。

本発表の第一節では、三木清の「人間学」の構想が、先行する哲学・倫理学研究——西田幾多郎(1870-1945)に代表される——の影響を受ける形で生み出されてきていることを確認する一方で、哲学・倫理学を「人間学」として規定する彼の発想が、それらの先行研究とは異なる要素を「哲学」「倫理学」に与えるものとなっていることを指摘する。具体的には、「語られざる哲学」(1918)や『パスカルにおける人間の研究』(1926)などの彼の初期の思索が、「フマニスム」や「人間の研究」という形において、後年の「哲学的人間学」の立場を先取りするものとなっていることを見る。そうした作業は同時に、当時における彼の言説が、いかなる点で先行する哲学・倫理学研究から影響を受けており、いかなる点で先行研究には見られない新しい論点を導入しているかを明らかにするだろう。

その上で本発表は第二節で、三木が1933年から1937年ごろに執筆したとされる論文「哲学的人間学」の内容に関して、それが「人間」を「歴史性」の観点から分析する試みとして展開されていることを指摘するとともに、そのような「人間学」としての「哲学」がどのような特徴を有しているか、ならびにそれがどのような意味で「倫理学」的な性格を持つものとして規定されているか、を検討する。それを通じて我々は、彼のいう「人間学」が、「哲学」をはじめとする人間の学問的知識を、その都度の歴史的・社会的状況と結びつけた歴史的的事象として描き出すことによって、そのような「哲学」「倫理学」の歴史性に対する反省を欠く先行研究に批判を加える意図に裏付けられていることを看取しうる。こうした理解はまた、「人間学」としての「哲学」が、その都度の歴史的・社会的状況においてある「人間」の有様を解明する試みであると同時に、そのような歴史的变化に即した形における新しい「人間」像を打ち建てることを通じて、未来の人間生活・社会のあるべき姿を描き出す試みとして、一種の「倫理学」的な考察としての性格を付与されている事実をも闡明することになる。